頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
―アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築―
報告書

中部アフリカ熱帯林住民の生活史に関する比較研究
―貨幣経済の浸透と生業戦略の多様化–

派 遣 者：大石高典
派遣期間：2013 年 3 月 22 日～3 月 31 日
派 遣 先：フランス共和国・パリ国立自然史博物館

キーワード：民族誌，質的記述分析，地域間比較、ガボン，カメルーン

1．研究課題について　(400 字程度)

本研究では，グローバル化に伴い，生業や社会にドラスティックな変化が見られる中部アフリカの森林居住民のうち，外部社会との接触のあり方が対照的なコンゴ盆地北西部の 2 つの地域，とくにカメルーン東南部地域と中央アフリカ共和国南部地域からコンゴ共和国北東部を取り上げ，これらの地域に居住するピグミー系狩猟採集民（バカ人とアカ人）と焼畑農耕民（バクウェレ人とンガンドゥ人）について，人口動態，親族関係，土地所有，移動性，配偶者選択，産子数などについて蓄積された一次資料に基づいて，生業活動の多様化や定住化に伴うライフスタイルの変化が，彼らの生活史戦略にどのような影響を与えているのかを定量的に検討することを主眼とする。両者の最も大きな相違は，バカ人が近隣農耕民を媒介とせずに外部社会と直接交渉を始めているのに対し，アカ人の外部社会との接触は，近隣農耕民の媒介のもとに限られていることである。

2．派遣の内容　(400 字程度)

派遣先では、セルジュ・バウシェ教授が部門長を務める民族生物学・環境人類学研究室を訪問した。バウシェ教授は、1970 年代から中央アフリカ南部のロバイエの森のアカ人を研究対象とした詳細な民族誌を数多く発表している。本研究課題について、森林居住民の生業や生活史に関する定量的な分析だけでなく、社会文化変容の定性的な側面との関連に目を向ける必要性をコメントいただいた。現在同研究室メンバーの活動が活発なガボンにおける研究状況についても説明を受け、比較対象として、北東部に居住するバコヤ人が適切ではないかというアドバイスを得た。今回の派遣では，パリを拠点に、短期間ながら複数の研究者を訪問することができた。26 日には、カメルーン北部の農耕民 Dupa の研究を 20 年以上継続しているパリ第 10 大学のエリック・ド・ガリーン博士とパリ市内で、28 日には、ベルギー・ブリュッセル自由大学のジョアリ博士とブリュッセルで会い、貨幣経済化と飲酒慣行の変化、自然保護と地域住民の関係など、中部アフリカ地域研究の最新動向に関して情報収集を行った。

写真１：パリ国立自然史博物館は植物園(Jardin des plantes)の敷地の中にある。

3．派遣中の印象に残った経験や体験　（800 字程度）

今回の派遣の直前の 2013 年 3 月初旬に、派遣先の研究者であるエレーヌ・パジュジー博士が急逝された。パジュジー博士は、1970 年代から 1990 年代にかけて、コンゴ盆地中央のウバンギ川、サンガ川、コンゴ川三大支川の合流部下流のトゥンバ湖を中心とする湿地帯に居住する漁労農耕民とピグミー系狩猟採集民の食生活に関する先駆的研究を行った研究者であり、派遣者は熱帯アフリカの漁労活動に関心を持つものとして、ご指導をいただいていた。今回の渡航時には、すでに追悼の集まりも終わっていたが、ご遺族とお会いし、お悔みを述べることはできた。昨年末に訪問した際には、パジュジー博士はご自宅に呼んでくださり、ご家族ともどもアフリカ話に花を咲かせたことに思いを寄せた。

派遣期間中、食用品の買い出しを兼ねて 2 つのアフリカ人街を訪れることができた。一つはパリ市内北部の地下鉄シャトー・ルージュ駅周辺であり、もう一つはブリュッセル市内中心部のマトンゲ地区である。パリ市内ではカメルーンを含む西アフリカ出身の人々を多く見かけるが、ブリュッセル市内では両コンゴ出身者が多く、リンガラが飛び交っている（写真 2）。

写真 2：マトンゲ地区のレストランの看板。リンガラで書かれたコンゴ料理のメニューが並ぶ。

それぞれの地区では、アフリカから飛行機で運ばれてくる布や日用品、食材が売られている。特にシャトー・ルージュでは食材の品ぞろえがよく、キャッサバちまき、ヤシ油、プランテン・バナナ、ギニアヤム、キャッサバの生葉、ココと呼ばれる *Gnetum* 属野生植物の葉っぱ、焼いて食べることができるサフと呼ばれる果実、淡水魚の燻製などありとあらゆるものが売られている。派遣者の研究テーマの一つはコンゴ川水系における淡水漁労であるが、2011 年から調査しているコンゴ共和国ブラザビル市内の市場から運ばれてきているヒレナマズ科やコイの仲間のディスティコドゥス科の魚の燻製を見ることができた。アフリカ人街は、他の市街とは異なる賑やかな活気にあふれており、アフリカの市場を想起させる。ちょうど同じ時期に、ASAFAS アフリカ地域研究専攻博士課程の園田浩司さんが調査のためパリに滞在していたので、キャッサバの冷凍生葉を購入して、2 人で中部アフリカの代表的料理の一つであるサカサカ（ポンドゥ）をこしらえて食したのはよい思い出となった（写真 3, 4）。

写真 3：冷凍のままマトンゲ地区で売られていたカメルーンさんのキャッサバ生葉。

写真 4：できたてあつあつのポンドゥとごはん（サカサカとも呼ばれる）。

4. 目的の達成度や反省点　（400 字程度）

派遣先には 2010 年秋に 2 か月間滞在研究したことがあるほか、アフリカの調査地への行き帰りにたびたび訪問し、親交を深めていたので、先方の研究者は派遣者のこれまでの研究をよく知っており、非常にスムーズに研究打ち合わせを行うことができた。中部アフリカにおける狩猟採集民研究の世界的な牽引者の一人であるバウシェ教授と、本研究課題についてじっくりディスカッションすることができ、具体的なアドバイスを多数得られたことが今回の派遣の一番の成果だと言える。また、来年度以降、本研究課題のために滞在研究を行う場合に受け入れ研究者となっていただけること、国際会議の企画の際にはアドバイザーの一人として参加いただけることなどが確認できた。ジョアリ博士、ド・ガリーン博士

らとディスカッションできたのも、文化研究やサバンナ地域における研究との接続や比較を考えるうえで有効であった。反省点としては、派遣先の若手研究者らが調査地に出張中などで不在であったため、当初予定していたセミナー発表ができなかったことが挙げられる。

5．今後の派遣における課題と目標（400 字程度）

来年度以降の派遣準備として、前回 1 月にはアメリカ・ワシントン州立大学を訪問し、2 月から 3 月上旬にかけては別財源によりカメルーンに調査渡航を行い、さらに今回はフランス・国立自然史博物館を訪問した。以上を通じて、これまで派遣者が調査を行ってきたカメルーンとコンゴ共和国に加え、中央アフリカ共和国とガボンの森林居住民を視野に入れた、コンゴ盆地北西部の大部分をカヴァーする森林居住民の生業・生活史比較研究の構想枠組みが大まかにできあがりつつある。有効な地域間比較を行うためには、中部アフリカ地域内で大きな変異がみられる市場経済化、自然保護、開発など、森林居住民の生活に影響を与えうる政治経済条件について整理する作業が必要である。中部アフリカ森林住民を対象とした生態人類学研究では、日本、アメリカ、フランス、イギリスを中心に、過去約半世紀の研究史の中で、それぞれが独自の伝統を作り上げてきている。今後の派遣では、具体的なデータや民族誌を基にした本格的な共同研究を進めてゆく中で、それぞれの研究伝統の利点を吸収することに努めたい。